

五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集

はら 子 じょう あと 原 子 城 跡

(市史編纂事業に伴う中世城館試掘調査報告書)



1995年

青森県五所川原市教育委員会

原

子

城

跡

序 文

五所川原市教育委員会

教育長 釜薙 裕

原子城跡（原子城遺跡）は、五所川原市大字原子の八幡宮の西側に位置し、市内で確認されている8つの城館跡の中の1つとなっています。

本報告書は、五所川原市史の編纂事業の一環として、中世史解明の手掛かりを得るために発掘調査した結果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代前期・中期・後期、平安時代、室町時代の遺物や遺構が確認されました。

調査面積も少なく、遺跡の全容を明らかにするのはこれからですが、本報告書の刊行により、いささかでも今後の埋蔵文化財の保護と五所川原市の中世史解明、また中世城館の調査研究に役立つところがあれば幸いに存じます。

今回の調査にあたりまして調査担当者の小山彦逸氏をはじめご協力をいただいた多くの方々に深甚なる感謝を申し上げます。

平成7年3月

原子城跡調査にあたって

五所川原市史編集委員会 自然・原始・古代・中世部会長

小口 雅史

本調査は、五所川原市史編集委員会の自然・原始・古代・中世部会において検討している通史編担当部分の執筆計画を策定する過程で、文献史料の欠を補うために必要資料を収集する目的で企画されたものである。

周知のごとく、当市域に関する文献史料はあまりにも少なく、通史を叙述するためには、考古学の成果が必要不可欠である。また近年の安藤氏ブームの中で、とくに中世史解明に対する期待も高まっている。それにもかかわらず、当市域内で発掘による中世資料はいまだ得られておらず、地元の研究者等による精力的な表面採取資料に頼らざるを得ないのが現状であった。こうした表面採取資料は、大変貴重なものではあるが、遺跡の性格や時期を確定するには、様々な困難がともなわれている。

そこで自然・原始・古代・中世部会では、少しでも中世に関する発掘資料を得るべく、限られた時間と予算の中で、数回にわたる検討を重ね、また地権者などの協力を得ながら当市における中世の主要な城館遺跡の一つである原子城跡を調査することに決定した。

原子は、中世には浄願寺という、かつて夷島松前にあって浄土真宗の北方教線拡大に先駆的な役割を果たした重要寺院が、夷島撤退後、一時置かれた場所とされ、北方中世史上、注目すべき場所である。したがってそこに置かれた原子城の実像解明は、単に五所川原市の歴史解明のためのみならず、北方史研究の進展にとっても急務である。当調査は、そのための一歩に過ぎないが、今後の研究にとって貴重な第一歩となることが期待された。

調査は市民による発掘の体験学習を兼ねることとなり、夏休み期間中に数名の市民の方に御協力いただきながら進めることとなった。

その結果、限られた範囲の調査ではあるが、予想されたようにいくつかの貴重な成果が得られた。これは考古学の発掘調査による成果であって原子城の性格や時期を確定するための一級資料である。その全貌は本書を参照いただくと、とくに原子城が15～16世紀に城館として確実に利用されていたことが明らかになったことは特記しておきたい。

自然・原始・古代・中世部会では、すみやかにその成果を本報告書として公刊することにした。未解明の点がまだまだ多いとはいえ、本書が活用され、今後の研究のための重要な踏み石となることを期待してやまない。

凡 例

- 1 本書は五所川原市の市史編纂事業の一環として、原子城跡（原子城遺跡とも登録されている）の試掘調査報告書である。
- 2 原子城跡は『五所川原市史』史料編1では遺跡台帳にのって「原子城遺跡」として紹介をしたが、中・近世の城館の発掘調査報告書では「〇〇城跡」「〇〇館跡」と記載されることが一般的であることから、本報告書でもそれらにならって「原子城跡」とした。
- 3 本遺跡の登録番号は05006である。
- 4 試掘調査は平成6年8月18日から同年8月21日まで野外調査、同年9月から12月まで屋内整理作業を実施した。
- 5 押図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。
- 6 土層の注記にあたっては、「新版標準土色帳」（小山正忠・竹原秀雄：1987）を参考にした。
- 7 本報告書の編集は小山彦逸が行ない、執筆は各調査指導員が分担して行なった。執筆者は文末に（ ）で記入しておいた。
- 8 本報告書の監修は新谷雄蔵調査指導員が行なった。
- 9 出土遺物はすべて、五所川原市歴史民俗資料館に保管している。
- 10 発掘調査にあたって、下記の諸氏からご協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）
阿部修三（土地所有者）、阿部健治（土地占有者）、三上セツ（土地所有者の姉）、五所川原市都市建設部区画整理室（北川智章、松本匡史、小田桐繁寿、工藤 駿）、長尾秀幸（現場作業員）、長尾義雄（現場作業員）、永沢秀夫（県文化財保護指導員）、工藤 忍（立正大学学生）、柴谷圭美（体験学習参加者）、内山七重（体験学習参加者）、長峰敬子（体験学習参加者）、阿部富夫（体験学習参加者）
- 11 本報告書作成にあたって、下記の諸氏からご協力・ご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）
佐藤 巧（県立郷土館）、工藤 大（県立郷土館）

目 次

序文

原子城跡調査にあたって

凡例

第I章 調査要項と調査方法	1
第1節 調査要項	1
第2節 調査日誌	3
第3節 調査方法	4
第II章 検出遺構と出土遺物	6
第1節 中世	6
1 検出遺構	6
(1) 掘立柱建物跡	6
(2) 竪穴建物跡	6
(3) 土 壌	6
(4) 焼 土	9
(5) 溝 跡	9
2 出土遺物	10
(1) 陶磁器	10
(2) 鉄製品	13
(3) 古 銭	13
第2節 縄文時代～古代	16
1 縄文時代	16
(1) 検出遺構	16
(2) 出土遺物	16
2 古 代	19
(1) 出土遺物	19
第III章 成果とまとめ	20

第 I 章 調査要項と調査方法

第 1 節 調査要項

調査目的

『五所川原市史通史編—中世—』執筆のために、考古学的な手法による資料の収集に努め、五所川原市史の内容を豊富にすると共に、津軽地方の中世史解明の手掛かりを求める。

調査期間

平成 6 年 8 月 1 8 日～同年 8 月 2 1 日（4 日間）

調査面積

3 6 平方メートル

調査組織

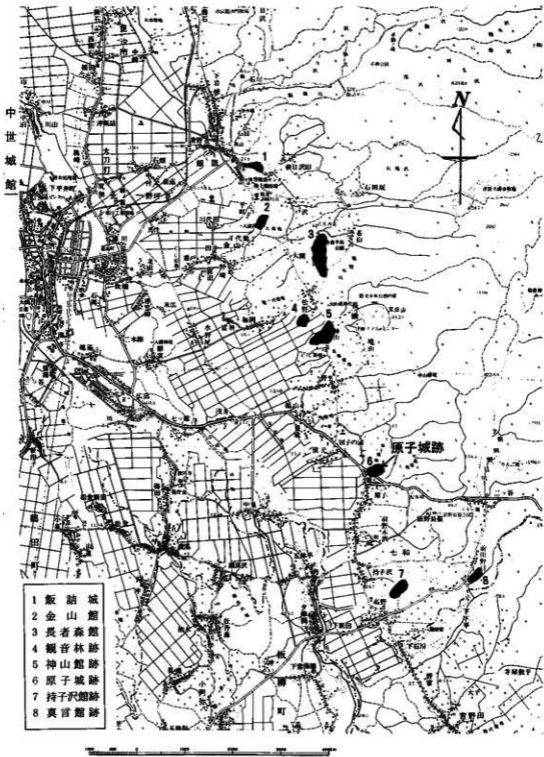
主 体 者 五所川原市教育委員会（教育長 釜 港 裕）
事 務 局 五所川原市史編纂室

調査参加者

調査指導員 小口雅史（五所川原市史編集委員自然・原始・古代・中世部会長：弘前
大学助教授）
◇ 新谷雄蔵（五所川原市史編集委員：日本考古学協会員）
◇ 福田友之（五所川原市史編集委員：日本考古学協会員）
◇ 工藤清泰（五所川原市史編集協力者：日本考古学協会員）
◇ 半沢 紀（五所川原市史編集協力者：青森県考古学会員）
調査担当者 小山彦逸（五所川原市史編集協力者：日本考古学協会員）
調査事務局 高橋藤樹（五所川原市史編纂室理事・室長事務取扱）
◇ 佐藤文孝（五所川原市史編纂室主査）

その他

出土遺物等は五所川原市歴史民俗資料館で保管する。
調査報告書は平成 6 年度に刊行する。



第1図 五所川原市域の中世城館分布図 (本図は五所川原市作成の管内図を複製した)

第2節 調査日誌

平成6年

8月18日(木) 晴れ

五所川原市史編纂室で正午から調査担当者、調査指導員及び事務局と試掘調査についての目的と調査方法などについての検討会を開く。午後1時から原子城跡の主郭部分に郭トレンチの設定のために杭打ちを行なう。そしてトレンチ1から粗掘を開始する。粗掘段階で縄文時代の前期の土器片等が遺構堆積土から出土した。これらの遺物は中世の時期に遺構構築等によって掻き上げられたものであることを確認する。中世の生活面で中世陶磁器破片が出土した。トレンチ1の中世の生活面を確認した段階で遺構の平面プランを確認する。その日のうちに、トレンチ2の粗掘にも入る。

8月19日(金) 曇り時々晴れ

昨日に続き、トレンチ2の粗掘を半分ほど、行なったあと、午後に行われる「発掘体験学習会」のために粗掘部分を残して、トレンチ3の粗掘に入る。10時頃には調査指導員の福田友之氏が調査に参加する。福田指導員にはトレンチ1の遺構で、精査を実施したほうが良いと思われる第1号土壌と第2号土壌、そして縄文時代の埋設土器の精査を行なっていただいた。午後からは、トレンチ2で発掘体験学習が新谷雄蔵先生指導のもとで行なわれた。

トレンチ3の粗掘中、固く踏み締めたような部分で柱穴を確認したので、その面で粗掘を一時中断する。そして、トレンチ4の粗掘に入った。トレンチ4堆積土は厚く、堆積土中には縄文土器をはじめ、須恵器破片などが出土した。しかしこれらの遺物はトレンチ1と同じく、中世の時期に遺構構築等によって掻き上げられたものであることを確認する。トレンチ4の中世面の上面で柱穴跡と溝跡を確認する。トレンチ1の各土壌のセクション図等の作成を行なう。

8月20日(土) 雨

昨日に引き続き、トレンチ4の粗掘と精査を行なう。この日は調査指導員の半沢 紀氏と、立正大学学生工藤 忍氏、県文化財保護指導員の永沢秀夫氏が調査に参加され、その協力を得ながら調査が進められた。トレンチ2には半沢指導員と工藤氏に入っていただき土壌の掘り下げを行なっていただいた。市役所都市建設部の方々には各トレンチの配置を測量していただき、新谷指導員と永沢氏には各トレンチのセクション図を作成していただいた。トレンチ2の第3号土壌の覆土上面から古銭2点と、遺構外からは、越前の甕の破片や中国陶磁器片が出土した。トレンチ4からは中世の遺物は出土しなかった。ただ、中世面で確認した部分からさらに補助トレンチを設けて掘り下げたところ、より下部に柱穴

が確認された。

8月21日(日) 曇り

各トレンチの埋戻し作業を行なう。埋戻しが終わったあと発掘調査の機材を後片付けして、今回の試掘調査をすべて終了した。

第3節 調査方法(第2図)

今回の調査は、中世城館の郭(平場)内の具体的生活の様相を知るために行なわれたものである。しかし限られた時間などに制約されていることから次のような調査方法で実施した。

まず、調査面積を最大限に狭める。そして調査の成果が充分得られるよう、前回の「縄張り調査」の成果を踏まえつつ4ヵ所のトレンチの設定を行なった。その問題意識とは下記のようなことである。

トレンチ1は、主郭に出入りするための「虎口(こぐち)」が確認される可能性が非常に高い地点であることと、門跡などの遺構が検出される可能性が高いことから設定した。

トレンチ2と3は、主郭の中心であることから、孤立柱建物跡や堅穴建物跡、土壇といった遺構が確認される可能性が高いことから設定した。

トレンチ4は、郭の縁辺部分にあたり、城館の縁辺部分には一般的に柵列などが設けられることが多いことから、柵列跡の柱穴が確認される可能性が高いということで設定した。また堀跡(畝堀)を挟んだ反対側には土塁が存在していることから、主郭部分と土塁との関係も明らかにできるのではないかと考え設定した。

今回の調査はあくまでも中世城館の試掘調査ということで、縄文時代の遺構が確認された場合には、将来の調査に委ねるという考え方でのごんだ。

また、調査中に遺構等が確認された場合には原則として遺構の確認プランを平面図として作成して、重要と思われる遺構は掘り下げをすることにした。掘り下げは二分法を用いた。また、図面作成は基本的には20分の1を原則として、詳しい実測が必要なものについては10分の1、5分の1等の整理しやすい縮尺を用いた。

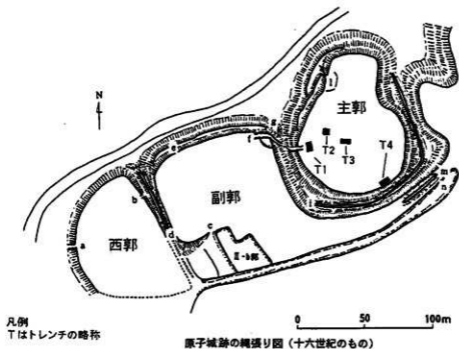
出土遺物の取上げは各トレンチごと、層位別に出土年月日を記入して行なった。基本的には、遺構内、遺構外とに分け、別途遺物番号を用いた。

写真は、遠景、近景、確認状況、完掘状況等を各遺構ごとに撮影した。

(小山 彦逸)



第2図 原子城跡地籍図とトレンチ配置図



原子城跡の縄張り図(十六世紀のもの)

第3図 トレンチ配置図

第Ⅱ章 検出遺構と出土遺物

今回の試掘調査は中世城館期の遺構と遺物の確認に重点が置かれた。しかし中世城館を構築する際に、掻き上げられたと思われる状態で、縄文時代や古代（平安時代）の遺物がダンボール2箱ほど出土した。そこで、中世城館期と縄文時代・古代を節で分けて述べることにする。

第1節 中世（第4～8図）

1 検出遺構（第4・5図）

（1）掘立柱建物跡（柵列跡）

掘立柱建物跡と考えられる柱穴は各トレンチから確認されたが、柱穴のほとんどは建物として結ぶことはできなかった。しかしトレンチ4の縁辺部分に柱穴が等間隔に並ぶものがあった。並びから判断して柵列跡と考えられる。

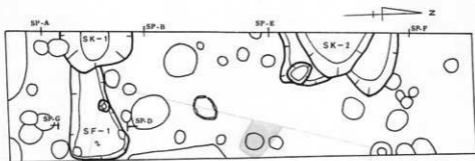
（2）竪穴建物跡（SI-1）

トレンチ2から1軒検出されたが、全体平面プランの確認はできなかった。平面形はおそらく長方形になると考えられ、規模は短径で2.1メートルであった。壁高や壁の立上りは精査できなかったために不明である。覆土上面は焼土や炭化粒子が多く見られた。遺物は覆土上面から15世紀から16世紀の朝鮮粉青沙器の口縁部破片が出土した。そのようなことから、この竪穴建物跡はそれ以前に構築されたものと考えられる。

（3）土 墳（SK-1～SK-4）

土墳はトレンチ1から7基、トレンチ2から2基の合計9基確認された。そのうち、掘り下げをして精査できた土墳はトレンチ1で2基、トレンチ2では2基だけであった。これら精査できた土墳について述べることにする。

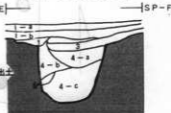
第1号土墳（SK-1）トレンチ1南側の西壁から検出された。試掘区域に半分ほどかかったもので、全体の平面プランは確認することはできなかった。おそらく長方形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは、20センチ前後で浅かった。壁は垂直に立ち上がる部分と緩く立ち上がる部分がみられ、底面は固く締まっている。堆積状況から判断して一時期に埋められたものである。出土遺物としては覆土中から鉄製品の釘が1点出土した。



SF-1セクション図

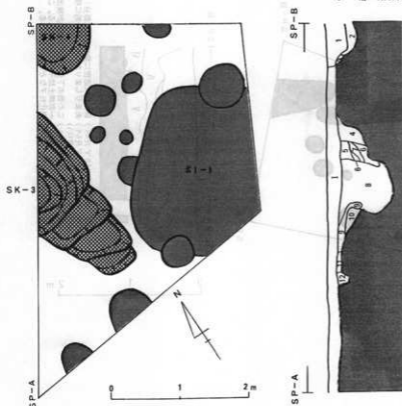
SK-2セクション図

SK-1セクション図



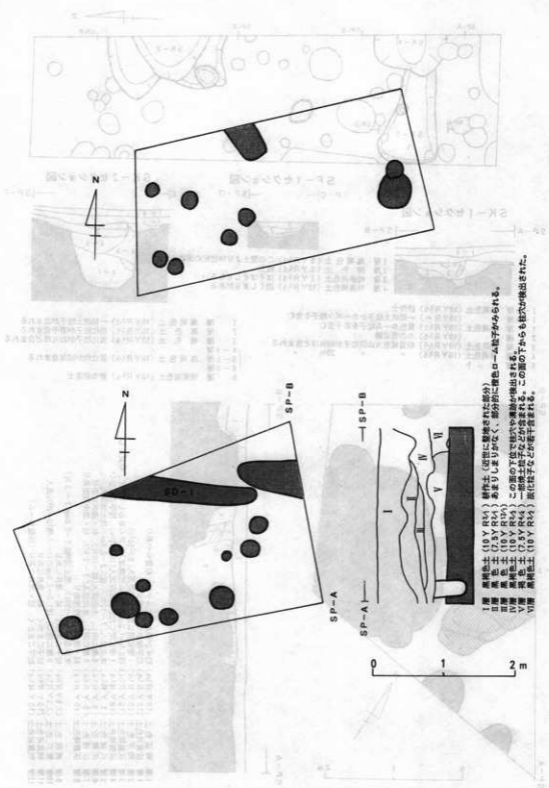
- 1-a層 黒褐色土 (10Y R4/5) 耕作土
 1-b層 (10Y R4/6) 一部焼土粒子かカーボン粒子を含む
 1層 黒褐色土 (10Y R4/4) 黄色ローム粒子を若干含む
 2層 黒褐色土 (10Y R4/4) 木の皮の層
 3層 暗赤褐色土 (5Y R4/4) 明黄褐色火山灰粒子が90%ほど含まれる
 4層 黒褐色土 (10Y R4/4) " " 20%
 5層 ビット

- 1層 黒褐色土 (10Y R4/4) 一部焼土粒子が含まれる
 2層 黒褐色土 (10Y R4/4) 炭化粒子が若干含まれる
 3層 褐色土 (10Y R4/4) 炭化粒子が20%ほど含まれる
 4-a層 暗褐色土 (10Y R4/4) 炭化物が90%含まれる
 4-b層 暗褐色土 (10Y R4/4) " " " " " "
 4-c層 暗褐色土 (10Y R4/4) " " " " " "
 5層 明黄褐色土 (10Y R4/4) 壁の崩落土



- 1層 暗褐色土 (10Y R4/4) 粒子の粗さがミルク状、結核や砂あり
 2層 暗褐色土 (10Y R4/4) 粒子の粗さが、しまりあり
 3層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、水浸入(5~10%)
 4層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、水浸入(5~10%)、結核あり
 5層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、水浸入(10~15%)、粒子こまかい
 6層 暗褐色土 (10Y R4/4) 水浸入(7~10%)、粒.3~0.8mmの塊状体あり
 7層 暗褐色土 (10Y R4/4) 水浸入(5~10%)、結核あり
 8層 暗褐色土 (10Y R4/4) 水浸入(3~8%)、結核あり
 9層 暗褐色土 (10Y R4/4) 水浸入(3~10%)、焼土層あり(5~8%)
 10層 暗褐色土 (10Y R4/4) 水浸入(3~10%)、焼土層あり(5~8%)
 11層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、粒.1.0~2.0mmのロームあり
 12層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、粒.1.0~2.0mmのロームあり
 13層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、粒.1.0~2.0mmのロームあり
 14層 暗褐色土 (10Y R4/4) 1層に同じだが、粒.1.0~2.0mmのロームあり

第4図 トレンチ1とトレンチ2平面図・セクション図



第5図 <トレンチ3とトレンチ4平面図・セクション図

第2号土壌(SK-2)トレンチ1北側の西壁から検出された。この土壌も半分ほどかかって検出された。そのために平面プランは確認することはできなかった。おそらく楕円形を呈するものと考えられる。確認面からの深さは、93センチと比較的深い。底面は緩くカーブし、壁面は固く締まっていた。覆土には非常に多くの炭化粒や焼土粒が含まれていた。堆積土状況から判断して一時的に埋められたものである。出土遺物はなかった。

第3号土壌(SK-3)トレンチ2北西側の西壁から検出された。この土壌も全体平面プランは確認することができなかった。この土壌は、遺構の確認段階では長方形を呈していたが、掘り下げて精査したところ4基の土壌が切り合っていたことが確認された。覆土には非常に多くの炭化粒や焼土粒が含まれていた。堆積土状況から判断して一時期に埋め戻されたものである。覆土中から縄文土器片や15世紀から16世紀にかけての越前甕の胴部破片が出土した。掘り方などから判断して、この土壌の時期は16世紀頃と考えられる。

第4号土壌(SK-4)トレンチ2北西側の北壁から検出された。この土壌も全体平面プランは確認することはできなかったが、おそらく円形を呈するものと考えられる。この土壌上面の覆土から15世紀後半の中国青磁皿の胴部破片が出土した。

(4) 焼土(SF-1)

トレンチ1の南側から検出された。焼土の平面プランは隅丸方形で、底面は緩い「U」字状を呈している。規模は長径120センチ、短径68センチで、深さは20センチと比較的浅かった。焼土層は8センチほど堆積していた。この遺構からは鉄製品の釘7点と中世陶磁器破片(中国青磁碗・越前甕)が5点出土した。この土壌から鉄製品の釘が多いことから、最終段階では建物に使った柱などの材料を燃した土壌ではなかったかと思われる。出土遺物などから判断して、この土壌の時期は15世紀から16世紀頃と考えられる。

(5) 溝跡(SD-1)

トレンチ4から2本の溝跡が検出された。この溝跡は時間がなかったために掘り下げて精査することができなかった。また部分的な確認であったためにどのような形で設けられているのかなどは不明である。

(小山彦逸)

2 出土遺物 (第6・7図)

(1) 陶磁器 (第6図)

陶磁器は、舶載製品と国産製品に大別できる。舶載製品には、中国製の青磁と白磁、朝鮮製品の粉青沙器がある。国産製品には、越前焼がある。

A 中国製品

A-1 青磁 (第6図1~4)

青磁には碗と皿がある。

A-1-a 碗

I類 外面に蓮弁文を施すタイプ

a類 片彫りによる蓮弁文を施すタイプ (1)。

1は外面に片切彫りによる蓮弁文を有する碗の腰部と思われる。薄い青緑色の釉調を呈し、貫入はない。素地は灰黒色を呈している。年代は14~15世紀と考えられる。

b類 外面に線描きによる蓮弁文を有するもの (4)。

4は外面に約2ミリの線描きの蓮弁文が4ミリ間隔に描かれた碗と思われる。釉調は黄緑色を呈し、二次火熱を浴びたようで、器表にはピンホールが目立ち、蓮弁の線は白色に変化している。素地は淡い灰色を呈し、緻密である。年代は16世紀と考えられる。

II類 内面に印花文を施すほかは無文のタイプ (2)。

2は内面に印花文を有するほかは無文のタイプの碗と思われる。口縁は玉縁状を呈すると考えられる。見込み印花文の一部の一条の沈線が確認できる。釉調は黄緑色を呈し、大きめの貫入が目立つ。素地は薄めの灰色で、一部褐色を呈する。年代は15世紀と考えられる。

A-1-b 皿

口縁が朝顔状に開いた、いわゆる稜花皿 (3)。

3は腰部から屈折し外反ぎみに口縁に至る、いわゆる稜花皿と呼ばれるタイプの腰部と思われる。内側面に流水文の崩れた沈線を有する。施釉は薄めでロクロ成形痕が確認でき釉調は黄緑色を呈し、目立たない程度に貫入が入る。素地は灰色を呈している。年代は15世紀後半と考えられる。

A-2 白磁 (第6図5)

白磁には碗がある。

A-2-a 碗

口縁が玉縁状をなすもの(5)。

5は口縁が玉縁状をなした白磁の碗と思われる。玉縁は小さめに形成されている。釉調は淡い水色を呈し、貫入はない。素地は白色を呈している。年代は12世紀後半～13世紀を考慮しておきたい。

B 朝鮮製品

B-1 粉青沙器(第6図6)

粉青沙器の製品には碗がある。

B-1-a 碗

いわゆる「そば茶碗」と呼ばれるタイプ(6)。

6は素地の地肌・色合いがそばに似ていることから、いわゆる「そば茶碗」と呼ばれるタイプの碗の口縁部と思われる。外面にはロクロ成形痕が確認できる。釉調は透明感のない白濁気味の青灰色を呈し、器表は凸凹であるが光沢がある。口唇部には口紅風に薄茶色の鉄釉がかすかに確認できる。素地は灰黒色を呈し、1ミリ程の白色砂粒が混入している。年代は15～16世紀と考えられる。

C 国産製品

C-1 越前窯の陶器(第6図7～11)

越前窯の製品には、搦鉢・甕・壺がある。

C-1-a 搦鉢

口縁部内面に段を有するタイプ(7)

7は口縁内面に段を有し、口唇部を尖り気味にロクロで引き上げた越前窯の搦鉢と思わせる。内面には10本一単位の卸目が施され、それは連続しない。器表は赤褐色をなし、小さめの砂粒を多く含んだ褐色の素地を呈している。年代は16世紀と考えられる。

C-1-b 甕

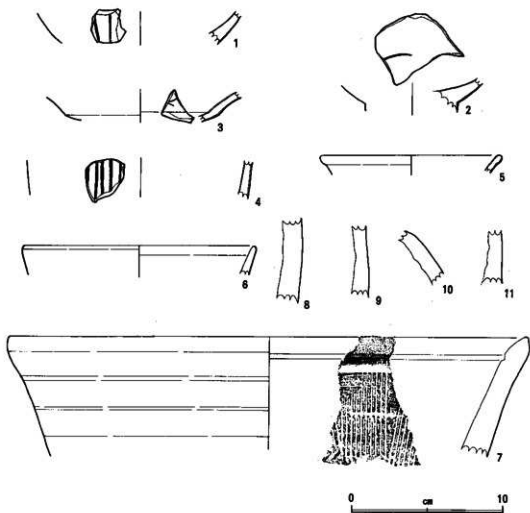
器の肉厚から甕と考えた(8)。

8は越前窯の甕と考えられ、器表は黄白色と黒褐色の斑文様をなしている。素地は黒っぽい褐色を呈し、砂粒と雲母が多量に混入され、内面は約1～2ミリ程の白色砂粒が確認できる。年代は15～16世紀と考えられる。

C-1-c 壺

器の肉厚から壺と考えた(9～11)。

9～11は越前窯の壺と考えられ、10が肩部で、9・11は胴部と思われる。9は器表・内面とも黄褐色を呈している。10は器表が黄褐色をなし、内面は濃い茶褐色を呈してお



No	出土地	層位	産地と名称	器形	年代	特 徴	素地	釉 調
1	トレ3、P-4	生活面	中国 青 磁 碗	14~15	外面片切り彫りによる蓮弁文	灰 黒 色	薄青緑色	
2	トレ1、P-6	SF-1 覆土	中国 青 磁 碗	15	内面印花文あり、口縁端反りタイプ	青 灰 色	薄青緑色	
3	トレ2、P-4	第1層上面	中国 青 磁 碗	15後半	彼岸花、内側面に流水文の削れた線描きを有する	灰 色	オリーブ色	
4	トレ1、P-3	SF-1 覆土	中国 青 磁 碗	16	線描き蓮弁文を有する(二次火焼)	淡い灰色	オリーブ色	
5	トレ2、P-3	SK-3 覆土上面	中国 白 磁 碗	12~13	玉縁口縁の彫、小さめの玉縁	白 色	淡い水色	
6	トレ2、P-1	SI-1 覆土上面	朝鮮 粉青沙器 碗	15~16	いわゆる「そば茶碗」(白色砂粒混入)	黒 灰 色	青 灰 色	
7	トレ3、P-1	生活面	日本 越 前 磁鉢	16	口縁部内面に段を有し、内面10本一単位の節目	褐色	(器表赤褐色)	
8	トレ2、P-2	SK-3 表土上面	日本 越 前 壺	15~16	器表黄白色と黒褐色の斑文様	黒灰色(砂粒と雲母混入)		
9	トレ1、P-4	SF-1 覆土	日本 越 前 壺	15~16	器表・内面とも黄褐色	灰色(砂粒と雲母混入)		
10	トレ1、P-7	SF-1 覆土	日本 越 前 壺	15~16	器表黄褐色、内面濃い茶褐色	灰色(砂粒と雲母混入)		
11	トレ1、P-8	SF-1 覆土	日本 越 前 壺	15~16	器表茶褐色	灰色(砂粒と雲母混入)		

第6図 陶 磁 器

り、また内外面にロクロ調整痕が明瞭に確認できる。11は器表が茶褐色をなしているが、内面は灰色を呈している。いずれも、素地は灰色で砂粒と雲母が混入されているが、緻密で厳選された陶土である。これらはいずれも15～16世紀の年表を考えておきたい。なお、10は器表に石ハゼも多く、あるいは信楽の可能性もある。

小 括

今回の試掘調査では、12世紀から16世紀にわたる陶磁器が出土した。しかし、その中でも15～16世紀のものが多いことが指摘できる。また、中国製の線描き蓮弁文の青磁碗と、越前窯製の播鉢は16世紀の年代でとらえられる陶磁器であり、特に後者は日常生活に使用したであろうから遺跡の年代を決める基準になり得る。さらに、同地からの表採資料には、中国製の染付のほか瀬戸美濃窯の大窯期の灰釉皿と鉄釉碗の出土も報告されており（半沢紀「中世陶磁器類」『五所川原市史史料編1』）、当遺跡の主体年代を15世紀後半～16世紀（戦国時代）に求めることが可能と思う。

（半沢 紀）

（2） 鉄 製 品（第7図1～9）

今回の試掘調査で出土した鉄製品のほとんどすべてのものが、トレンチ1の第1号焼土遺構（SF-1）内から出土した。用途がわかるものと、用途不明のものがある。用途が判明したものはすべて釘であった。

ア 釘（第7図1～8）

1～3、5～8のすべてが第1号焼土内から出土した。釘の長さは短いもので4.5センチ、長いものは6.0センチと計測できる。1～3はほぼまっすぐであるが、5～8は先端部が折れ曲がっていた。これらと共伴するかたちで15から16世紀の陶磁器が出土していることから、これらの鉄製品も年代的には15から16世紀のものと考えられる。

4は第1号土壇覆土中から出土したものである。

イ 不明鉄製品（第7図9）

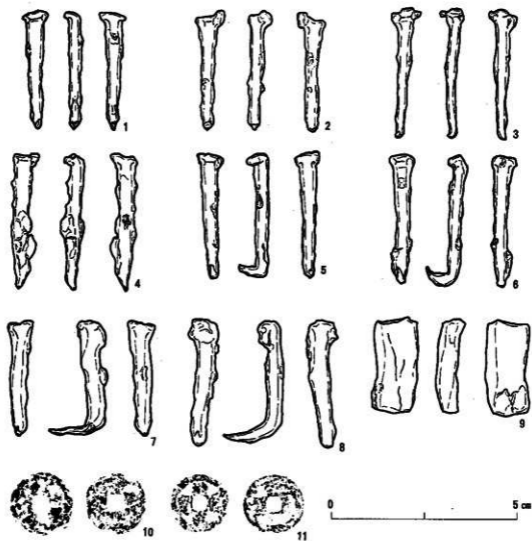
10はトレンチ1の遺構外から出土したもので、欠損品である。残存する部分は長方形に近く、肉厚であるがどのようなものとして利用されたかはわからない。この遺物も中世陶磁器片と共伴したことから15から16世紀のものと考えられる。

（3） 古 銭（第7図10・11）

10トレンチ2の第3号土壇覆土上面から出土した。古銭に記されている文字は判読することができなかった。

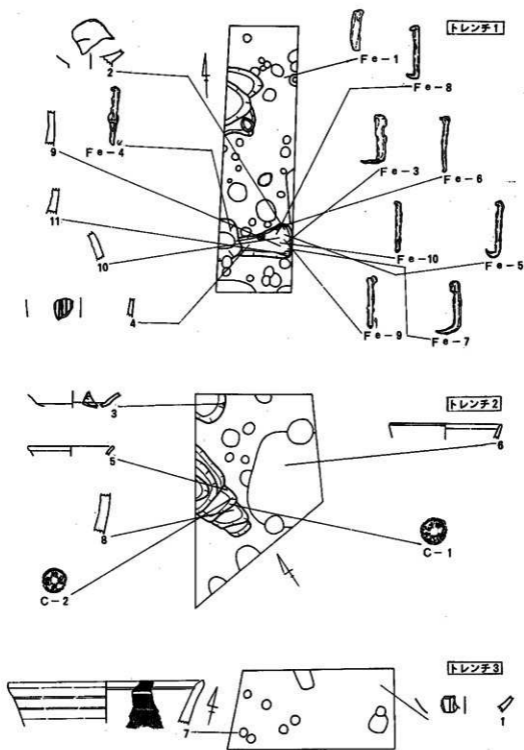
11もトレンチ2の第3号土壇覆土上面から出土した。古銭に記されている文字は「□□□寶」である。

（小山彦逸）



No	出土地	遺物番号	名称	年代	その他
1	トレ1、SF-1	Fe - 10	釘	15 ~ 16 C	
2	"	Fe - 9	"	"	
3	"	Fe - 6	"	"	
4	トレ1、SK-1	Fe - 4	"	"	
5	トレ1、SF-1	Fe - 8	"	"	先が折れ曲っている
6	"	Fe - 5	"	"	"
7	"	Fe - 3	"	"	"
8	"	Fe - 7	"	"	"
9	トレ1、遺構外	Fe - 1	"	"	
10	トレ2、SK-3	Fe - 1	古銭		
11	"	Fe - 2	"		

第7図 鉄製品・古銭



第8図 各トレンチ出土地点図 (縮尺不同)

第2節 縄文時代～古代

1 縄文時代(第9図、写真図版5)

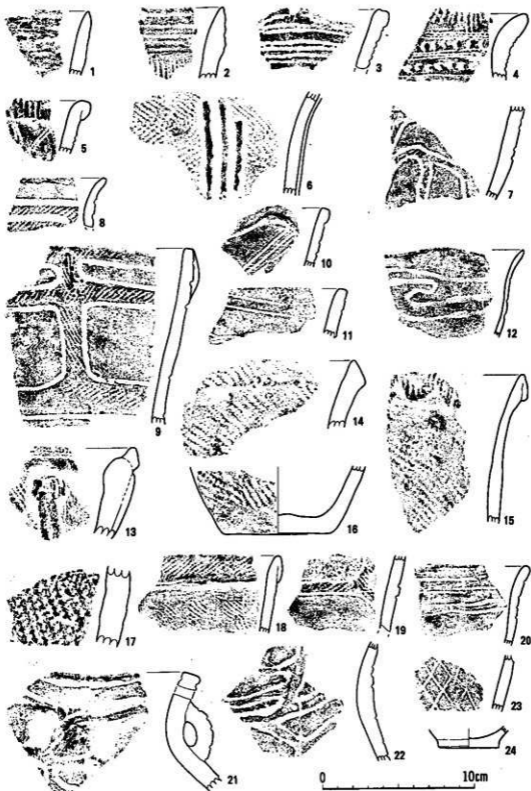
埋設土器が1基確認され、さらに土器・石器等が平箱で2個ほど出土した。出土層位は第I層である。

(1) 検出遺構(写真図版5)

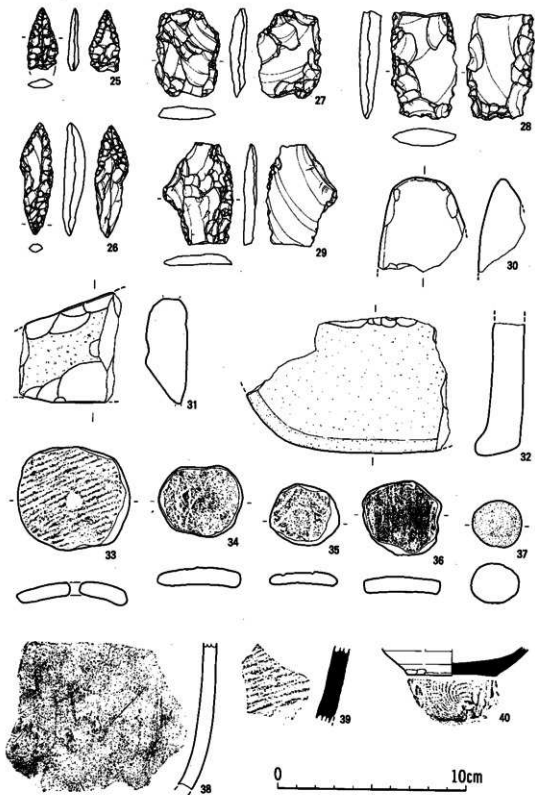
トレンチ1から埋設土器が1基検出された。土器の口縁部直径はほぼ36.5センチで、内部に焼土が入っていた。土器は前期末の円筒下層d₁式である。今回は、中世の城館調査が主目的であり、しかも調査日数の制約もあったため、この土器は取り上げず確認のみにとどめた。

(2) 出土遺物(第9・10図)

ア 土器—トレンチ1～4から縄文土器片が少数出土した。以下、トレンチごとに述べる。まず、トレンチ1では縄文前・中期の土器片が少数出土した。第9図の1～4は深鉢形土器の口縁部で、1～2には横位の縄圧痕があり、胎土には繊維が含まれている。また、3は波状で下端が横長の楕円形の窓になっているものであり、横位の縄圧痕がある。4も波状で横位や爪形状の縄圧痕がある。1～2は前期末の円筒下層d₁式、3は前期末の円筒下層d₁式、4は中期前葉の円筒上層b式である。また、トレンチ2からは4ヶ所のトレンチの中ではもっとも多く出土した。前～後期の土器片があるが、後期が最も多い。図の大半は深鉢や甕の口縁部である。5の斜位の縄圧痕と太い粘土紐がある口縁部は中期初頭の円筒上層a式、6の細い粘土紐を縦位に貼付したものは中期後半の土器である。また、7～9は磨消縄文、10～12は沈線文のあるもので後期前葉～十腰内I式であろう。また、トレンチ3からは中期の土器片が少数出土した。図示したものは深鉢形土器の口縁部と底部である。13の太い粘土紐を貼付した波状の口縁部は円筒上層a～b式、14の肥厚した口縁部、15の細い粘土紐を口縁部に貼付した土器は中期後半、16の底部は中期のものである。また、トレンチ4からは前期と後期の口縁部・胴部・底部片が少数出土したが、大半が後期である。このうち17の複節縄文の土器は円筒下層式、18の折り返し口縁の土器、21の貫通孔や橋状把手のある土器、23の網目状撚糸文の土器、さらには19・20・22の磨消縄文や沈線文のある土器は後期前葉～十腰内I式である。21はカメ棺であろう。また、20と24の表面には黒色のタール状物質が付着している。



第9圖 縄文土器



第10圖 石器・土製品・土師器・須惠器

イ 石器—トレンチ1～4から石器が8点出土した。25はトレンチ1出土の頁岩製の石鏃で、基部は欠損している。26はトレンチ2出土の頁岩製の石槍で完全品である。27はトレンチ2出土の頁岩製の不定形スクレイパー（搔器）、28はトレンチ3出土の頁岩製の不定形スクレイパー、29はトレンチ4出土の頁岩製のスクレイパーである。また、30はトレンチ3出土の細粒凝灰岩製の磨製石斧基部片、31はトレンチ2出土の安山岩製の半円状偏平打製石器片、32はトレンチ4出土の砂岩製の石皿片である。25は前期、26・31は前～中期、27・29・32は後期、28・30は中期のものであろう。

ウ 土製品—トレンチ2から土器片円盤が4点、球状土製品が1点出土した。土器片円盤（33～36）は土器片をすり減らしてほぼ円形にしたもので、33のみに孔がある。これらは大半が後期前葉の十腰内I式破片である。37は粘土を球状に丸めたもので、時期は後期であろうか。

2 古代（第10図、写真図版5）

（1）出土遺物（第10図）

土師器片1点と須恵器片2点が出土したのみである。38は土師器甕の胴部でトレンチ4、39は須恵器甕の胴部でトレンチ3、40は須恵器杯の底部でトレンチ4から出土したものである。この中で、40の底面には回転糸切り痕が残され、さらに火だすぎ痕もある。時期は平安時代中頃～後半（10～11世紀）のものであろう。

（福田友之）

第三章 成果とまとめ

今回の試掘調査は限られた日数の調査であったために、調査範囲も36平方メートルと狭いものであったが、予想以上の成果を上げることができたと考えている。以下、今回の試掘調査で明らかになったことを箇条書きにして述べることにする。

1. 原子城跡が中世城館として作られる以前には、少なくとも主郭部分には縄文時代前期末・中期初頭・中期前葉・後期前葉の人々が生活していた。また、平安時代に入ってから人も入ってきて生活していたようである。

2. 原子城跡の主郭部分は、城館を作る時（普請）に西側部分は削平して、東側部分は逆に盛土するなど比較的大掛りな土木工事が行なわれた。

3. 試掘トレンチを設けた部分のほとんどに焼土面が広がっていた。そのようなことから主郭部分では大きな火災などがあったと考えられる。また、検出された土壙で掘り下げをして精査した土壙のすべての覆土中には炭化物粒や焼土粒が多量に含まれていた。また、これらの土壙は意図的に一時期で埋められているという特徴がみられた。

4. 郭内には、掘立柱建物跡や堅穴建物跡といった少なくとも2種類の建物が存在していた。これらは県内で発掘調査されている城館とほとんど同じであると言える。

5. 掘立柱建物跡の柱穴などはあまり多くないことから、建物の建て替えは少なかったようである。ただし、柱穴が多く密集するような場所と比較的少なく検出される場所は地点によって異なるので今後の本格的な調査に期待したい。

6. 城館期に伴う出土遺物には陶磁器（中国・日本・朝鮮の製品）、銭貨、釘、用途不明な鉄製品などがあった。

7. 原子城跡が15世紀から16世紀にかけて城館として利用されていたということが裏付けられた。

以上のようなことが、今回の試掘調査から言うことができる。

ただ、まだまだ解明しなければならない問題も数多く残されている。たとえば、主郭部分であれば、主殿はどのような位置に設けられ、どの程度の規模であったのか。また、主郭以外の郭にはどのような人々が生活していたのか。原子城はどのような性格を有する城館で、それを支える経済基盤は何であったのか。……等々問題は山積されている。

今回の試掘調査の成果が今後の五所川原市域の中世史解明、また中世城館の調査研究に少しでも役立つことを願ってまとめたい。

(小山彦逸)

写真凶版



トレンチ1 調査前



トレンチ2 調査前



トレンチ2 調査中



トレンチ4 設定



トレンチ1の粗掘風景



トレンチ2の精査風景

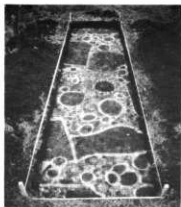


トレンチ3の体験学習風景

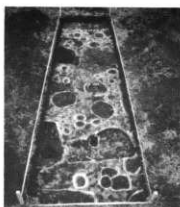


トレンチ4の粗掘風景

写真図版1 各トレンチ設定状況と粗掘風景



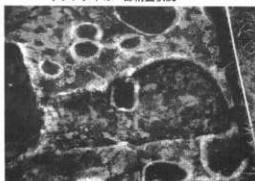
トレンチ1の遺構確認状況



トレンチ1の一部精査状況



焼土遺構確認状況



焼土遺構完掘状況



焼土遺構セクション



焼土遺構覆土中からの遺物出土状況



第1号土壌完掘状況



第2号土壌セクション

写真図版2 トレンチ1の全体と各土壌



トレンチ2の遺構確認状況



トレンチ2の遺構掘り下げ状況



第3号土坑セクション



第4号土坑セクション



第3号土坑内出土の古銭



トレンチ3の遺構確認状況



中国青磁破片出土状況

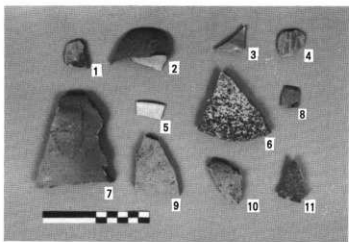


トレンチ4の遺構確認状況



トレンチ4の一部掘り下げ状況

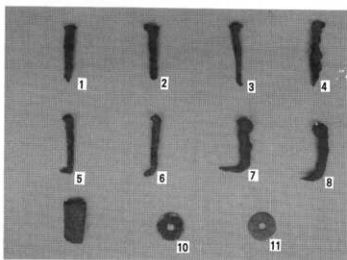
写真図版3 トレンチ2～4の全体と遺物出土状況



陶磁器外面



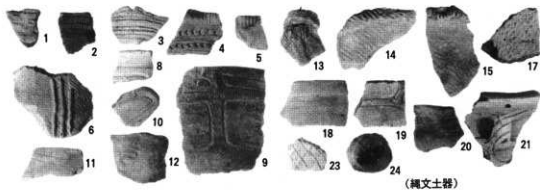
陶磁器内面



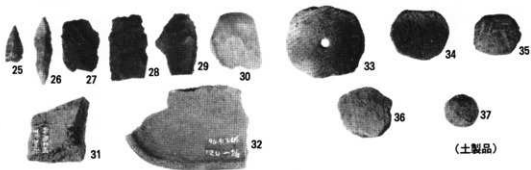
写真図版 4 城館期出土遺物（陶磁器・鉄製品・古銭）



埋設土器 (トレンチ1)

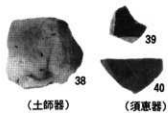


(縄文土器)



(石器)

(土製品)



(土師器)

(須恵器)

写真図版 5 縄文・平安時代の遺構・遺物

五所川原市埋藏文化財発掘調査報告書第17集

原 子 城 跡

- 発行年月日 平成7年3月31日
- 発行者 青森県五所川原市教育委員会
- 住所 〒037 五所川原市岩木町12番地
- 印刷 ㈱小野一印刷

TEL 0173⑨6604・FAX 0173⑨6604

